

遥弥生

起き抜けに冷蔵庫を覗く癖がついた。

佳代子が死んでひとり身になってからふた月だった。

ホルダの奥に卵がいくつもあり、未開封の牛乳。パックも庫内に横たわっていた。が、目玉焼きを作ったフライパンが流しにそのままになっているのを見て、一寸考えてからそのまま扉を閉めた。

棚の中段のガラス戸を開き、皿の山から大小ひとつずつ引きずり出して机の上に置いた。その隣に転がった食パンの袋から一枚取った。トースタが目に入ったので、手に取ったパンをその中に突っ込んだ。適当にダイヤルをあわせて火を入れた。

微かにまだ眠気があった。

時計が七時四十九分を指していたのに気が付いて、居間に向った。窓際のテレビの電源を入れた。リモコンのボタンを押してチャンネルを「1」に合わせた。学者のおばさんが老人の貧困について語っていた。それがとても真剣な顔で何だか可笑しかった。

音が鳴ったので腰を上げて食卓のほうを見に行った。焦げた匂いが漂っていて、パンが焼かれていた。端の方を適当にちぎって小皿に乗せ、残りを大皿に乗せた。両方持って居間への敷居を跨いだ。大きい方はテレビの前の文机に置いて、寒波の到来を告げる天気予報を耳だけで追いながら奥の仏壇に近づいた。

仏前に膝を揃えて腰を下ろす。

佳代子の前に供えをする。

線香に火をつける。

立てる。

鈴を鳴らす。

手を合わせる。

金属の震える音がやがて遠のいて、アナウンサの声が

戻ってきた。もうすぐ八時だと告げる声を合図に、朝食が待つ文机の前に座り直した。

欠けたトーストを齧りながら、ドラマの映るテレビ画面を眺めた。騒動はなんだか上手くまとまったよう、来週の予告が流れ始めた。そういえば今日は土曜日だった。あれと思ってカレンダを見やると、土曜のところに赤い字で歯医者と書いてあった。佳代子の葬式の日に予約してあったのを、振り替えたのだった。

滓だけになった皿を持って立ち上がった。どっこいしよと声が出た。

流しにいた先客の汚いフライパンが目に入った。皿を一度机に置いてから流しに向き直った。フライパンに溜った水をひっくり返し、乾いたスポンジを手にとって洗剤を付けた。水道のバルブを開くと、蛇口から流れ出した水が皴ばんだ手の甲を冷たく打った。

スポンジで削り取るように擦るのだが、鉄板の表面の油はそう容易くは落ちなかった。指の腹でこすってもまだ滑りが残っている感じがした。

泡のついていない手首で水道のハンドルを突き上げたところ、今度は勢いよく噴き出した。すぐにハンドルを握って下げると、嘔吐は収まって穏やかな水流に変わった。溜息をついて、フライパンに付いた泡を流した。汚れが落ちた感じはしなかったが、水を切って食器籠の中に突っ込んだ。収納の扉にぶら下がっていたタオルに手を伸ばした。微かに湿っていた。簡単に水滴を拭いて、それから居間に移った。肘が痛んでいた。

文机の前に胡坐をかいた。上に新聞が置かれていて、読もうと取り上げた。広げた左肩には、十二月十六日(金)とあった。佳代子は、金曜日の夕食を決まってカレーにするのだった。それで今晚の夕食はカレーと決めた。

……。

玄関先でバイクの音がした。郵便屋が来たぞ、とおぶくろを呼んだ。が、返事がないので自ら腰を上げた。畳敷きの居間から廊下に一步踏み出すと、足の裏が冷たさに触れた。あっと声が出たがそのまま戸口の方に駆けて行った。

玄関先に三つ並んだサンダルのうち二つに足を突っ込んで郵便受けに近づいた。箱の中には新聞と、「至急お読みください」と書かれた封筒が入っていた。いよいよかと慌てて開封すると、兄貴の召集令状ではなくて、水道代の請求らしかった。兄貴はもう五年前に死んでいた。

ほっとして、封筒は下駄箱の上に置き、小さく畳まれていた新聞の方を取り出して広げた。一面大見出しは亜米利加との戦争ではなくて、年金の支給年齢引き上げのことだった。日付欄には十二月二十四日(土)とあった。土曜日はいつも、佳代子と外食することになっていた。それで今日は外で食べようと決めた。

新聞を持って戻ろうとするど玄関に備え付けた電話が鳴った。受話器を持ち上げて右耳にあてた。

「山科ですが」

「なかはたです！ 歯医者の方！」

壮年のしかし力強い男の声を受話器の向こう側から聴こえた。

「ああ、いつもお世話になつとります」

「山科さん、今日ね、診察！ 二時半にね！」

首を傾げるが、予約を振り替えたことをすぐに思い出した。十二月にしたのだった。

「ああ、はいはい。行きますから」

「忘れずにね！ 二時半、ね！」

中畑医師のはつきりとした口調が念を押した。

*

「山科さん、歯磨いてる？」

「ええまあ、一応」

「じゃあ栄養失調だ。歯茎の状態が良くない」

中畑医師は困ったようにそう告げた。

「何が足りないんですか。具体的に」

「野菜！ あとカルシウム。こう言っちゃなんだけどさあ……山科さん、まともなもん食ってないでしょう！」

中畑医師の目がこちらを覗き込んできた。頭髮や声色は年相応だが、目元がまだきつぱりと輝いていた。

「気持ちばかりですがね、と言われた。慎重だった。言葉を選んでる感じだった。消毒液の臭いがそこかしこに漂っていて鼻をつついていた。」

「ともかくまた様子見ますよ。ちようど二週間後、ね！」

差し歯は歯茎の状態が悪くなるとよくないですから」

「いつですか」

左手をズボンのポケットに突っ込んで、手帳を引っ張り出した。そのまま開こうとするが、手に力が入らなかつたので右の手を添えた。しかし、指先がかさついていて、手帳のページは捕らえる先から逃げるように滑り落ちた。爪を立てて紙の隙間に差し込んで、ようやく開いた。顔が熱くなった。

「二週間後。だからえー、……年明けの一月七日！ 土曜日！」

日付を確認する中畑医師の声に従って、一月七日の箱に焦点を合わせた。細かい字がゆっくりと輪郭を伴ってゆき、鏡開きという文字列が明らかになった。書くものを持つておらず、あとで家のカレンダーに書いておこうと

思った。

「近くなったら電話しますから。年明けね！ 一月！」

「はい、ありがとうございます」

手帳を閉じてポケットにねじ込んだ。畳んだ買い物袋も入っていて、嵩張って左腿に違和感があった。立ち上がるはずと丸椅子に押し付けられていた尻が痛んだ。立ち去ろうとするど、

「元気に年越してね！ 良いお年を！」

十二月だった。忘れていた。

「ええ。よいお年を」

首だけで振り返って挨拶した。

待合室へと引き返した。ケータイの画面を見つめる若い女性や、手帳を忙しくめくる小太りな中年男性が言葉を交わすことなく座っていた。知人などいかなかったので、そのまま会計を済ませて診療所を後にした。

太陽の光は眩しく、吹き付ける風は痛かった。立ち止まってズボンの右ポケットに手を突っ込むと温かった。まさぐって紙切れを引っ張り出した。卵、牛乳、キャベツ、大根、ジャガイモ、味噌と書かれてあった。紙切れをしまつてもう一度歩き出した。いつもの十字路を左折して商店街へと向かった。左足がポケットの中の手帳に擦れて痛かった。屋外の冷たく乾燥した臭いが鼻腔をつついていた。

……。

「お爺さん、」

女性の声を背中に聞いた。八百屋の前だった。左手にジャガイモを持ったまま振り返った。

その華奢な女性は手帳を差し出していた。自分のものに似ていた。というか、自分のだった。

「私のだ」

声を荒げて手帳をひったくった。お爺さんと声をかけてきたのも腹が立っていた。どこに行っても老いぼれ扱いをされていた。

「どろぼう」

女性はなにも言い返さず足早に立ち去った。闇市は盗人が出るから気を付けろ、というおふくろの言葉を思い出した。子供は夜歩くと亜米利加に取って食われるぞとも言われていた。陽が西にあった。暗くなる前に帰ろうと思った。

紙切れに書かれてあった野菜を一通り買い物袋に入れた。夕飯を何にするかはまだ考えあぐねていた。メモに野菜がたくさん書かれてあったから肉か魚は冷蔵庫にあったのだろうと思っていた。籠が大根とキャベツの重みで右腕に食い込んでいた。

「ヤマさん、お金」

全部持って立ち去ろうとしているところを呼び止められた。八百屋の主人の声だった。

「まだ払ってないでしょう。ダメだよ持ってっちゃ」

「あれ、そうだったか」

首を傾げつつも尻ポケットから財布を取り出して千円札を引き抜いた。指はまだかさついていて指が札はざらついていて掴みやすかった。

「あいよ。お釣り。……ヤマさん、奥さん亡くしてしんどかるうけど頑張んなよ。俺も家内を亡くして一年ぐらいは引きずつたけどね。慣れればどつてことないよ」

第二の人生だと思つてさ、と八百屋に肩を叩かれた。

彼の手のひらにはまだハリがあつて、叩かれた右肩は痛かった。確かに励ましの言葉ではあるのだった。釣銭を受け取る指先は相変わらず震えていた。受け取った五円玉はズボンの右ポケットにしまい込んで、アーケードに

向き直つた。

……

ふと、自分がさつきどちらから歩いてきたか失念していることに気づいた。

頭を掻いた。ひっぱたいた。おふくろに叱られる、夜には米軍の空襲があるから早く帰らなくてはと焦つた。家で待っているはずの弟や妹のことを考えて胸が痛んだ。兄貴と親父は出征中で頼りになる男は自分しかないのだ、だから早く帰らねばと駆け出した。

往來の人々が、ゆつくりと、ぼやけていく視界の端に消えていった。濡れた頬を、向かい風が突き刺していた。ややあつて、漏れ出た老人の嗚咽が自分のものであることに気が付いた。

なぜ走っているのか判らなくなつてきていた。尋ねようにも佳代子はもういないのであつた。首の付け根の辺りから熱い血液が脳味噌に流れ込むを感じた。息苦しくなつてしやがみ込んだ。地面が目の前にあつた。

暫くそのままにしていた。

ふと見上げると電柱があつた。「なかはたデントルクリニツク」の広告が貼られている、家の近くの電柱であつた。出かけるたびに見るものでよく覚えていた。あたりを見渡すとよく知つた風景が広がつていた。いつの間にか家の近くに戻つてきていたのだつた。空の橙色はブルーに染められつつあつた。もう帰ろうと思つた。

寒風に耐えながら、とほとほと歩いた。靴の裏が擦れる音が後からついてきた。しばらくして家に辿り着いた。冷たいノブを捻つて扉を引き寄せた。佳代子の声を待っていた。が、冷え切つた薄暗い玄関には沈黙が横たわつただけだつた。腰掛けて靴のかかとに指を突っ込んだ。指先がズキリとした。

*

冷蔵庫の野菜室を開けると、そこにはキャベツと大根とジャガイモが待っていた。買い物袋の中身を覗き込んで、がっくりと肩を落とした。情けないほどにか細い叫び声のようなものが口をついて出た。袋を床に叩きつけた。ごそりと音がして、ゆつくりとジャガイモが転がり出た。右ポケットの覚書は丸めて放り投げた。けれどもゴミ箱へは届かないのだった。

首を横に振ると、再び冷蔵庫に向き直つた。何か栄養を取らねばならないのだった。野菜しかないの、サラダでも食べようと思つた。

野菜室の中に手を突っ込んで、キャベツとジャガイモを掴んだ。が、すぐにジャガイモの方からは手を離し、キャベツだけをかき抱くように持ち上げた。ほかはもう取り出す気にならなかつた。キャベツは机の上に置いた。すぐ近くに皿があつたが、いつ使つたものかはもうわからなかつた。

キッチン下の収納から包丁を取り出した。まな板もあるはずだったが探さなかつた。キャベツの真中に刃を立てたが、とても切れそうには思えなかつた。刀身の上に左手を添えて体重をかけると、掌の激痛と、ガサガサと鈍い音を伴つて不格好な断面が現れた。葉と葉との隙間に蠢くものがあつた。包丁を見ると嫌な粘液と、その身体の一部だつたと思しき滓のようなものがへばりついていて、だがまだそいつはキャベツの中で動き回っていた。頭が痛くなつてきた。

上の方の葉を一枚ほど剥がして近くの皿に乗せ、居間へと持つていった。文机の上に置き、しばし見つめた。

それから端の方を一寸ちぎって仏壇へと近づいた。
仏前に膝を揃えて腰を下ろす。

佳代子の前に供えをする。

線香に火をつける。

立てる。

鈴を鳴らす。

手を合わせる。

金属の震える音が遠のいて、再び静寂が帰ってきた。

部屋が暗かった。照明を付けようと部屋の隅の電灯のスイッチに近づいた。

ふとそこにかけられたカレンダーを見つめた。暗闇の中でもひとときわ目立つ赤字の「歯医者」の下、カタクチイワシのような弱い字で、何かが書かれていた。凝視したが判然としないので、電灯を点けてもう一度見つめた。

「流星群」

忘れもしない佳代子の字だった。

そういえば星を見るのが好きだったのだった。

顎を触ってしばらく沈黙していたが、やがて窓の方に向かった。窓の戸は長らく閉ざしたままで硬くなっていた。手のひらで押し込んで何とか動かすと、冷たい空気が顔全体を覆った。そこにはいつの間にか闇が現れていた。

見上げると、白い斑点が燦然と瞬いていた。

夜の風は穏やかで不思議と心地よかった。身を乗り出して星一つ一つに目を配った。

すると、空を眺める視界をふと横切るものがあった。

はじめは汚れか何かかと思つて、目を擦った。が、二

度、三度と通過を確認してゆくにつれ、その正体を確信した。

佳代子が確かにそこにいた。

声は聞こえない。

姿も見せない。

だが、あの星の一つ一つが佳代子なのだと思えた。

降り注ぐ流れ星を前に瞑目した。

流れ星には願い事をするのだと、佳代子が言っていたのを思い出す。微かに風の音がしていた。

両の掌を合わせて、祈りを捧げる。

夜が、体を包み込んで、飲み込もうとしていた。